

事例報告の要約

分科会：ホール・劇場など

団体名(会員数) ①サザンクス筑後運営ボランティア (登録300名・20団体) ②SOAC (ステージサブオペレーターアナウンスクラブ) (20 名)	(団体の住所/連絡先) 〒833-0047 筑後市若菜1104 (財)筑後市文化振興公社 サザンクス筑後内		
	(電 話)	(FAX)	(活動範囲)
	0942-54-1200	0942-54-1205	サザンクス筑後内
事例報告者	サザンクス筑後管理事業係長 久保田 力		
(タイトル)	サザンクス筑後運営ボランティアについて		
<p>財団法人 筑後市文化振興公社から、サザンクス筑後運営ボランティアについてご報告いたします。</p> <p>(設立の経緯)</p> <p>1995年(平成7年)筑後市市制40周年を記念して完成した公共施設が「サザンクス筑後」です。そこを管理・運営しているのが、私たち財団法人筑後市文化振興公社です。</p> <p>私たちの会館は16年目を迎えました。開館当初から管理・運営は財団がやっています。</p> <p>運営の形態は、最初は市の職員が直営で運営していましたが、その後、指定管理者制度が導入されて、市の職員は完全に撤退し、平成18年度から私たちが、財団を運営していることとなります。</p> <p>今は2期目に入っていて平成18年度から20年度までの3年間、それから25年度までの5年間 私たちが管理・運営することとなっております。</p> <p>市民が参加するボランティアについては、開館のその数年前から、市民参加型のホールを目指して様々な検討がなされてきました。開館に向けてのボランティア講座を開き、その講座で技量を習得した方々を開館当初より運営スタッフ(但しその頃は有償)と位置づけてきました。その2年後には、その中から更に専門性を持ったスタッフとして「SOAC(ステージサブオペレーターアナウンス クラブ)」を設立しています。</p> <p>いわゆる、市民の手によるホール運営を目指していった経過があります。</p> <p>それから16年たつて、マンネリ化や形骸化?というものも含めて、ボランティアに関していろいろな課題もっているのが現状であると思います。</p> <p>(活動の特色)</p> <p>1、サザンクス筑後運営・育成事業とボランティアスタッフについて</p> <p>私たちの一番目の大きな柱は、鑑賞事業です。年間、8本ないし9本のイベントを、さまざまなアーティストの方をお呼びして、音楽、演劇、芸能関係のものを筑後市民のみなさんへ提供していくという役割があります。いわゆる娯楽の一環であり、市民の皆さんの芸術文化意識の向上も含めて鑑賞事業をやっております。</p> <p>二番目の大事な事業は、育成講座です。開館当初から当会館は、市民文芸の発表の場であり、人づくりの場でもあるという理念を掲げてきており、その理念に従ってずっと育成講座を続けています。</p> <p>私たちは、フェスティバルを開催するに、出演者を外部から呼んで来て、筑後市民の方に提供するというだけの企画は考えておりません。市民自らが創造する・経験する・体験するという意味合いも含めて、筑後市民ミュージカルというものを創ってきました。これも大きな意味で、育成事業の一つと捉えております。</p> <p>平成16年度に開催された国民文化祭は、私たちにとってとても大きな事業であり、大きな経験となりました。国文祭の開催にむけて、新たなミュージカルを市民の手で創り上げてきたわけですが、この過程にはやはりボランティアなしにはとてもじゃないけど、私たち職員だけでは出来ませんでした。</p> <p>この福岡県で開催された「とびうめ国文祭」を期に、登録は一気に広がりをみせ、180名のボランティアの協力により創作ミュージカルは大成功を収めました。</p> <p>このことがきっかけとなり、サザンクス筑後の運営ボランティアは現在300名、20団体の登録となりました。</p> <p>2、劇場(地域通貨)・サザンカ通貨について</p> <p>これは他にはあまり例のないユニークな取り組みだと思いますが、「サザンカ通貨」を発行しています。これらの名称ですが、さざんかとは筑後市の花で、市の木が楠の木なので、あわせてサザンクス筑後といえます。</p>			

このボランティア活動に関しては、サザンカ通貨を抜きにしては語れません。

通貨の単位はクスとって、1円が1クスとっていただければいいと思います。

2003年(平成15年)10月から「サザンカ通貨(地域通貨)」を発行しておりますが、これを期に主催講座の受講生は元より、一般の方でも「時間」と「能力」をサザンクス筑後の運営に生かしたいとの思いの方であれば、どなたでも登録ができるボランティア制度を設立しました。

たとえば、花の水遣りから始まって駐車場案内・掃除など、いろいろな活動があります。

サザンカ通貨の申込みは、登録申請書に名前を書いてもらって、どういうボランティアに参加できるかにチェックを入れてもらいます。その後、私どもから、〇〇の催しがあるという呼びかけに応じて、ボランティアに参加していただくことでクスが貯まります。

先の国民文化祭が大成功に終わることができたのも、このサザンカ通貨が大きく関わっております。

サザンカ通貨のシステムを簡単にご説明いたします。

たとえば『今日のボランティアは、鑑賞事業の受付係で何時間入りました』としたら、クスの単価が800で、800クス×何時間、たとえば3時間やれば 2400 クスを 手に入れることになります。それでは、貯まったクスは何に使えるかといいますと、クスを使いたいときには「払い戻し請求書」に記入して提出することで使えます。貯めたものは、施設利用などにも使えます。

3、登録者と実際の活動についての成果と課題

(実働者の減少と新たなボランティアの参加)

現在、登録している運営ボランティアが300名・20団体あるとはいえ、年齢の高齢化などで実働者は少なくなってきました。新たな方々にどういふうにこのボランティアに参加してもらおうかが、頭の痛いところです。また、ボランティアの組織化も難しいのが現状で、運営ボランティアにリーダーがいないため、いつも職員がイベントごとに参加の呼びかけを行っております。組織化は、これからの課題です。

(クス発行とボランティア精神)

ボランティア精神(?)について考えたとき、「自分のためとかライフワークであるとか生きがいであるとか」人様々であると思います。ボランティアは無償であると考えている人に対しては、クスが対価として払われていることで「クスを稼ぐためにボランティアをしている」のか、と思われているのではないかと、悩んでいます。しかし、クスを活用して劇場を利用してもらえれば、沢山の人が劇場も賑わうことで・・・、これでもいいのかな?とも思っております。

(ボランティアと劇場の求める専門性)

私たちは、主催事業時の受付・会場係、場内アナウンスなどの仕事の養成はもちろんやりますが、専門性を持った舞台の音響・照明の仕事もできるボランティアの方を養成しています。しかし、素人の方に裏方の仕事を任せることが出来るようになるのは、なかなか難しいのが現状で、下手をするとお客様に迷惑をかけることになってしまいますので、どのように養成していけばいいのかが課題です。

(指定管理者制度のなかでの問題)

現在、指定管理の2期目というお話しをしましたが、平成25年度まであと3年しかありません。また3年後には募集が始まって審査を受け、指定を受ければ、またサザンクス筑後を運営していくことになります。指定管理の導入前までは、頑張って成果を残すんだ、という気持ちでやっていましたが、導入後は、5年ごとに仕切り直しを求められるので・・・、もちろん頑張り続ける気持ちは変わりませんが、やらなければいけない使命というものを帯びています。

しかし行政は、いくら予算でサザンクス筑後が運営できるかと、金額での評価を求めてきます。それでも私たちは、「お金ではなく運営の中身が大事なんです」と主張し続けて、2回の指定を受けてきました。これからも人材育成を主力の一つにおいてやって行きますが、これだけの様々な事業を私たち6名の職員でやっている中で、経費削減の求めにもこたえながら運営することは、大変厳しい状況にあります。

(最後に)

育成講座のなかに、「子どものための演劇広場」があり、今年で12年目になりますが、小学2年生から関わって今年、大学受験で演劇広場を卒業していった女の子の言葉を紹介します。

「私は11年間サザンクスの演劇広場にいました。今、17歳やけん、人生の半分以上ここに来とったいね。サザンクスがなかったら今頃何しようとかいな?、と時々考えるけど思い浮かばんたい。何て言ったらいいか分からんけど、ここはすごい所、すごいいいところ。サザンクスなしじゃ、演劇広場なしじゃ私の人生は考えられんたい。大学行ってそれからどうなるか分からんけど、絶対戻ってくるけん。絶対、サザンクスの演劇広場も続けとってね。」とって大学受験にいきました。

事例報告の要約

分科会：ホール・劇場など

団体名(会員数) 春日市ふれあい文化センター (名)	(団体の住所／連絡先) 〒816-0831 春日市大谷6丁目24 春日市ふれあい文化センター内 春日市教育委員会社会教育部文化振興課		
	(電話)	(FAX)	(活動範囲)
	092-584-3366	092-501-1669	春日市ふれあい文化センター内
事例報告者	事業担当 谷口大志		
(タイトル) 想いをカタチにする～人財づくり講座事例報告～			
<p>春日市ふれあい文化センターから、人財づくり講座についてご報告いたします。 まず、春日市ふれあい文化センターとは、春日市が直営で運営している多目的の文化施設です。</p> <p>(人財づくり講座について)</p> <p>人財づくり講座の正式の事業名は、「春日市文化のまちづくり人材養成事業」です。</p> <p>1、目的としては 自主的な芸術文化活動の促進と、芸術文化によるまちづくりを推進できる人材の養成を掲げており、この講座の運営は、春日市教育委員会社会教育部文化振興課が直接行なっております。 ふれあい文化センターの仕事は、沢山の部屋・ホールがありますので貸し館事業だけではなく、鑑賞事業とか、音楽の玉手箱というプロの音楽家を派遣するアウトリーチ・タイプの事業をはじめとする振興事業や、少年少女合唱団を運営する育成事業もやっています。 これらの事業は、市民の皆さんがセンターのいろいろな施設・機能を主体的に使用して、職員の持っているネットワークなどもどんどん活用していただくことで、選択肢の広い活動ができるように、また、そのような活動ができる市民を増やしたいと考えております。</p> <p>2、事業開始のきっかけは、平成19年度に行なわれた「福岡県立美術館所蔵品巡回展」です。 これは春日市には美術館がないため、ふれあいセンターのギャラリーやその他の施設を使って、子どもたちや市民の皆さんに美術に触れていただく機会をつくらう！ということで始まった事業です。 その際、「アートボランティア」というボランティアを募集することになりました。 美術品の解説のお手伝いから、体験コーナーなども企画し、いろいろボランティアスタッフに活躍してもらった訳ですが、大成功をおさめました。 その後、夏休みを利用して、美術館が市内にないのなら、市のバスを使って希望する子ども達を美術館に連れて行こう！ということになり、これが「夏休み子どもアートバスツアー」という事業です。 この事業を実施するに際し、「アートボランティア・スタッフ」の募集が、引き続き行なわれました。 事業内容は決まっているものの、子どもの引率・体験をどのするのように運営するか、具体的な事柄が決まっていなかったため、それを自主的にいろいろと検討し、運営まで担当するボランティア・スタッフです。</p> <p>(人財づくり講座とは)</p> <p>この自主性を重視した「アートボランティア・スタッフ」の募集から、これをもう一段階ステップアップして、「企画からできる人材」を養成できないか？という想いから始まった講座です。 私たちの方からは、これまで文化芸術の自主事業で何年もの間やってきたことを伝え、ボランティアスタッフの皆さんからは、新しいアイデアを出していただいで一緒に春日の町を盛り上げて行くことが出来ればよいのかな、ということから始まりました。 このような人材が春日市にどんどん増えていけば良いな～と、もちろん春日市在住でなくても春日市ふれあいセンターを使っていただき、春日市を盛り上げてくださる方が増えていくように期待しております。</p> <p>参加者は、初年度13人、去年は6人でした。今年の参加者は、8名でした。</p>			

ー22年度の活動紹介ー

人財づくり講座は、5月～7月の間に7回開きました。

初回は、ふれあい文化センターをよく知ってもらおう目的で、ホールの中を良く見てもらったり、光をあてたり、音を使ってどのような舞台を作ることができるか、を体験してもらいました。

それからホールにある施設や、舞台裏を探検するバックステージツアーもおこないました。

2回目は、コミュニケーションにかかわる研修や、文化の持っている力とか、文化施設の役割などのレクチュアを古賀弥生さんから「文化のまちづくり概論」や「文化施設の役割」についてお話しをしていただきました。

3回目は、他の団体の事例を聞くということで、ワークショップをやっておられる団体のキーパーソンに来ていただき、「文化のまちづくりの事例報告～キーパーソンに聞く～」を開きました。

4回目は、去年の人財づくり講座の受講者に来てもらって、いろいろな体験を聞く機会や、レクチャー＆ワークショップ「企画書・予算書づくりとプレゼンテーション」として、文化の持っている力を学んだうえで、どんなアイデアが浮かんできたか、そのアイデアを形にしていく練習などを実施しました。

その後は、形となったアイデアを企画書に纏めたり、企画審査会に発表するための「プレゼンテーションの練習」をして、本番の企画審査会に臨みました。

企画審査会に通った一つの事業をご紹介します。

審査会の審査員は、春日市の職員です。発表の様子、審査の様子、そしてプレゼンテーションの後にはどのようにして企画が採用されるのかななどを、全ての受講生の人に見てもらいました。

今回決まった企画は「ぺったんこにみる」です。

これは全くのオリジナルではないのですが、中居 真理さんと言う京都にお住まいのアーティストの作品です。中居 真理さんと、文化・芸術・サブカルチャーなどの分野でまちづくりの仕事をしている福岡市の団体との共同でのワークショップとなりました。

内容は、携帯電話で部屋や景色の隅っこを撮って、それを模様として扱い、パターン化することでデザインとして作品にするというワークショップです。

人財づくり講座は、企画審査委員会に発表するまでですので、その後は、ボランティア有志による活動ということになります。その後、この「ぺったんこにみる」は市の予算化がなされ、11月14日に実施が決定しました。そのタイトルは、『芸術文化ワークショップ ペったんこにみる かすが』です。

その後の活動は、ワークショップへ向けた打ち合わせ会を、3回(8月・9月・10月)開きました。

受講生にワークショップを続けてもらい、まず広報計画について打ち合わせを行い、チラシの作成・印刷発送などをお願いし、イベントを成功させる最後まで担当してもらいました。

実際のワークショップでは、スタッフという腕章をつけてもらい、受付の手伝いや参加者の誘導などの仕事をお願いし、当日の参加者が、写真や携帯で部屋の隅などいろいろなところを撮る指導者の立場です。

最初は部屋の中で練習し、やがて外に出て影なども使って身近なものを撮って見ました。

最終的には、撮った写真を切り取って組み合わせ、壁にかけることになります。

作品としては、ふれあい文化センターの図書館前に展示していますが、この企画は、ただ作って終わり！ということではなく、今まで見過ごしてきた物、見過ごしてきた所、隅っこが気になってしょうがない、また、そういう風な角度を変えた物の見方、アンテナを少し追加すれば、また違った捉え方ができるという体験ができたことに意義があるものと思います。

当初は、参加者各自の企画をふれあいセンターがサポートすることを考えていましたが、今回は、卒業制作として『ワークショップの企画から実施(審査会も催す)まで』を行なうことになりました。

3、反省と課題

(1) 広報先とその時期について

人財づくり講座について広く知ってもらうため、どこに広報すればもっと効果が上がるのか悩んでいます。例えば、広報先を、春日市近隣の文化施設や大学校、あるいは前年度ワークショップに参加した方などに広げ、事業開始を5月と早める案で、アートバスのボランティア経験者の参加も見込める時期設定を検討しています。

(2) 講座の内容検討と課題について

参加者各自が企画を練り上げる時間をもっと取るべきかな、と考えています。

今年3年目で、卒業制作が終わった後も参加者自身でイベントの企画実施までやれたことは評価に値します。しかし、ふれあいセンターが市直営であるため、これまでのノウハウの獲得と蓄積が今後の人事異動によって継続できるかどうか懸念されます。